

よみがえった昭和のモダン

旧小熊邸

平成十年九月二十八日に喫茶店として再出発を果たした「旧小熊邸」。今回は、この歴史的建築物が完成するまでのエピソードを中心に紹介します。

「旧小熊邸」は、昭和二年に当時の北大農学部助教授で後の理学部長、小熊捍博士おぐま けんが自宅として建てたものです。

当時、欧州留学から帰国した博士は、ある建築家に自宅の設計を依頼しました。彼の名は、田上義也たがひよしや。北海道の近代建築の幕開けを飾った建築家として、今も知られる人です。

博士はフランスの住宅写真を田上氏に見せ、デザインの希望を話しました。しかし、田上氏が持ってきたプランは、博士にとつては風変わりなものでした。階段や廊下の位置さえも気に入りません。多くの注文をつける博士。頑として受け入れない田上氏。二人は議論を重ねた結果、田上氏の原案通り進



昭和初期の小熊邸 (写真提供 北海道大学)

めることで決着しました。

一応は納得した博士でしたが、建築が進むにつれ、また首をひねりはじめました。原因は「曲がった柱」。田上氏が、建築途中で柱が垂直とは限らない工

法なのだ」と説明しても、博士はどうしても腑に落ちません。建築費の返金を田上氏に求めましたが、建築が進み柱が垂直になるとようやく納得し、この問題も解決しました。

こうして現在の南一西二〇に完成した邸宅は、博士の秀囲気を生かした設計により、羽を広げたタカを思わせる外観となりました。また、田上氏の師匠であるアメリカの建築家F・L・ライトの影響で、窓サッシに施された幾何学模様（幾何学模様）の透かし彫りや、八



復元された照明とスタンドグラス

面体のブリキ製照明器具などアメリカ風の裝飾物が目立ちます。ところが、応接室のスタンドグラスは、アールヌーボーと呼ばれる欧風のもの。これは、博士の強い希望によるものと言われています。

博士は、北海道大学教授を退官後、離札するまでの二十数年を、この邸宅で過ごしました。その後旧小熊邸は、北海道大学医学部教授柳壮一博士や初代北海道銀行頭取の島本融氏（島本融氏）など家主が変わり、平成七年には老朽化のため解体が危ぐされましたが、市民グループや企業の積極的な取り組みが実り、伏見に移築されました。

藻岩山（藻岩山）のふもとに静かに立たずむ旧小熊邸は、これから私たちの街を見つめていきます。

（平成十年十一月号・第五十一回）